

チャイコフスキーの愛と死

ドイツ生まれの作家クラウス・マン（1906～1949）に『悲愴交響曲』という小説があります。これは、チャイコフスキーを主人公とする物語で、日本では『小説チャイコフスキー』というタイトルで出版されました。ここで話題にしたいのは、クラウス・マンがこの小説を書いた動機です。彼は自伝の中でそれを説明しており、少し長いですが下に引用します。

◇◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇◆

私の第二の長編小説は「悲愴交響曲」（1935年）と題した。主人公はロシアの作曲家ペーター・イリーッチ・チャイコフスキーである。私がこの主人公を選んだのは、彼を愛しているからであり、彼を知っているからである。私は彼についてならすべてを知っている。（中略）

私が彼のすべてを知らぬわけがどうしてあるだろうか。彼の運命であった愛の特別なかたち、それを私はたしかに知っていた。そしてこのエロスに必然にともなう靈感と屈辱、長い苦悶とつかの間の至福に私はあまりにも精通していたのだ。このエロスに帰服するや、なんといってもこのようなものであるわれわれの社会のなかでは、人は異邦人となる。致命の傷をこうむることなくして、この愛に身をゆだねることはできないのだ。（中略）

「祖国なき人」、私の偉大な、感動的な友ペーター・イリーッチはいくつもの意味でそうだった。彼を孤立させ、アウトサイダーたらしめ、ほとんど賤民たらしめたのは、そのエロスのみではない。彼の才能の性質、芸術様式もまた、いずれかの国で完全に是認されるためには、あまりに雑多、あまりに正体不明、あまりにコスモポリタンのであった。ロシアでは「西洋的」とみなされた。批評家らはチャイコフスキーの世俗的な憂鬱のなかにはムソルグスキーの野性的なヴァイタリティがないと嘆じた。ドイツ人は彼の「アジア的粗暴」を非難した。さらにライプツィヒやベルリンの識者らの見解によれば、わずらわしいことにフランスの影響まで加わっているのだ。ところが、パリではあまりに「ゲルマン的」とみなされた。ベートーベンの亜流であって、人気あるリムスキー＝コルサコフよりもはるかに「ロシア的特性」が少ないというのである。

彼は亡命者、追放の身だった。政治的な理由からではなく、どこをも故国と感じられず、どこにも故国となるべきところがなかったからである。どこにいても彼は苦悩した。遂に名声がやってきた。だがそれは、償いも慰めもありえぬ殉難に対する反語的な、多くの場合遅すぎる補償なのである。

慰めは存在しない。慰めなき、名高いペーター・イリーッチは慰めなき、ひそや

なるということを意味しています。実際、チャイコフスキーは、同時代のロシアの作曲家たちをアマチュアだとみなし、彼らとの交流には一線を画していたようです。また、チャイコフスキーは何度も長期間の外国旅行を行い、ロシア国内でも頻繁に移動して、最晩年になるまで定住地を持ちませんでした。クラウス・マンは、チャイコフスキーをコスモポリタンだと見なしたかったのでしょう。それは、クラウス・マン自身が、1933年のヒトラー政権の成立とともに国外に脱出し、反ナチ活動を行い、それがためドイツ国籍を剥奪され、祖国を失ったからでした。

さて、引用文の最後に、クラウス・マンはチャイコフスキーの死について書き、「彼は自殺するのだ」と断定しています。クラシック音楽史の中でも最大の謎のひとつが、チャイコフスキーの死因です。

チャイコフスキーは、1893年10月16日、ペテルブルグにおいて、自らの指揮によって交響曲第6番「悲愴」の初演を行います。ところが21日に体調を崩し、そのまま25日に帰らぬ人となりました。初演から、わずか9日目のことでした。死因は長い間、20日の夜に行ったレストランで飲んだ生水で感染したコレラとされてきました。しかし、1980年になって新説が権威あるイギリスの音楽事典に載りました。それは、チャイコフスキーが宮廷のある有力者の甥と同性愛関係を結んだことが暴露されそうになり、昔の法律学校仲間が名門校の名誉を守るために、密かに裁判を行って自殺を宣告し、それに従ってチャイコフスキーは自らヒ素系の薬物を飲んで死んだというのです。その後も、この自殺説を否定する研究などいろいろな見解が出されていますが、いずれも決定打ではなく、チャイコフスキーの死因はいまだに謎です。

「彼は自殺するのだ」というクラウス・マンの断定は、1980年代に登場した自殺説を半世紀も前に先取りした感があります。小説『悲愴交響曲』では、レストランで、チャイコフスキーは、彼にしつこく話しかける店主に「水を一杯もらいたい」と命じます。それに対し店主は「マイスターのおっしゃるのは、ミネラルウォーターでございましょう。ご存知でございましょう、ペテルブルグには、コレラが少し流行っております。生水をお飲みになるのは、よろしくございませぬ」と答えます。その慇懃さに厚かましさを感じたチャイコフスキーは腹を立て「水をいっぱい、と私は言ったんだ」と怒鳴ります。物語では、運ばれてきた水が生水なのかミネラルウォーターなのかははっきりしません。とにかくチャイコフスキーはそれを飲み、死の床につきます。ですから、自殺といっても、ロシアン・ルーレットに近い自殺です。クラウス・マンは、チャイコフスキーに、自分と同様の自殺願望があると感じていたのでしょう。クラウス・マンは、42歳の時に睡眠薬の過剰摂取によって自殺します。

チャイコフスキーの死の謎や同性愛について考えなくても、「悲愴交響曲」を純粋

に音楽として聴き、感動することはできます。しかし、彼の心に秘められた苦悩と歓喜をいくばくかでも想像するならば、おそらく 19 世紀に作曲された交響曲の最高峰に位置するであろう「悲愴交響曲」のすごみをより感じることはできるのではないかと思います。クラウス・マンの自伝は、その想像の手助けになるかも知れません。

([名古屋大学交響楽団第 113 回定期演奏会パンフレット](#))